

## 幼児の音楽表現を引き出すピアノスキルの育成

—幼稚園教諭・保育士養成機関における実践と考察—

蜂谷 葉子

### 一、はじめに

保育の現場においては、指導者たる保育者には、幼児の音楽表現活動を引き出し育むことの出来るピアノスキルが求められる。正確に音符を再現できる演奏能力だけではなく、幼児の多様な表現を誘うような、音楽的かつ色彩を感じさせる音色や音空間を表現できる、あるいは幼児の音楽表現に接してその場で幼児が表現したい感覚を理解判断し、適切な助言と導きを行うことのできるスキルである。

将来の幼稚園教諭・保育士を養成する機関においては、これを前提とするピアノスキルの習得はもちろん、必ずしも豊富な演奏スキルが無くとも、まず音楽を感じて楽しむことができ、心地良い音楽的な音色でピアノを奏でることができる能力、自身が弾くことのみならず、幼児の歌声や演奏する楽器の音などを聴ける習慣、ひいては幼児の音楽表現に対して理解判断できる能力を、初歩の段階から意識的に育てることを目標に設定することが必須である。

本学における授業での具体的な事例をいくつかあげれば、初歩段階におけるこどもの歌の弾き歌いの重視と、それを補助するオリジナル教材の作成と実践、そして初歩段階から連弾という二名以上の奏者によるアンサンブルの導入などがある。その他、バズスティンメソッドなどの優れた既存教材を援用しながら、指導を構成している。

本稿では、幼児の音楽表現を引き出すピアノをテーマにおいた指導、その具体的な内容の検討と、その実践について述べたのちに考察を加える。

### 二、研究の目的と手法

#### (一) 問題意識と研究の目的

幼稚園教育要領(文部科学省)、保育所保育指針(厚生労働省)における教育・保育の内容五領域《健康、人間関係、環境、言葉、表現》における「表現」、中でも

「音楽」に関する項目に留意すると、「音楽、リズムやそれに合わせた体の動きを楽しむ<sup>(1)</sup>。」「歌を歌ったり、簡単な手遊びや全身を使う遊びを楽しんだりする<sup>(2)</sup>。」「音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなど楽しむさを味わう<sup>(3)</sup>。」と述べられている。このように、幼児が「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする<sup>(4)</sup>」ためには、それを促し伸ばすことのできる指導者がま

ずは必要である。

また幼稚園教育要領には、「幼児の自己表現は素朴な形で行われることが多いので、教師はそのような表現を受容し、幼児自身の表現しようとする意欲を受け止めて、幼児が生活の中で幼児らしい様々な表現を楽しむことができるようにすること<sup>(5)</sup>」とある。美しい音楽を聴いて感動すること、美しい音とそうでない音の判別ができること、そして自分自身も美しい音を出そうと表現しようとする、これらは豊かな音楽表現のための第一歩であるが、ここでもやはり、こうした幼児の音楽への感覚を促し引き出すようなピアノスキルを、保育者が有していることが望ましい。

このように、保育者には、自身が演奏をすると言うよりも、むしろ幼児の音楽的表現を引き出し育むようなピアノスキルが求められているのではないか。こうした問題意識から、本研究では、特に「幼児の音楽表現を引き出すピアノスキル」をどうすれば保育者に習得させることができるのか、その方法の考察と実践を研究の目的とする。

#### (二) 研究の手法

以下に述べるいくつかの方策を中心に組み合わせて指導方針を構成し、それを本学の授業(音楽Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ)受講者に対して実践し、実際の反応やアンケート等を参照しながら考察を加える。本稿の主眼である「幼児の音楽表現を引き出すピアノスキル」習得のために取り入れた要素として、主には「こどもの歌の弾き歌い」と、「アンサンブル体験としての連弾」が挙げられる(それぞれの詳細は後に項目を設けている)。

なぜ「弾き歌い」を重視するか。保育の現場では、指導者たる保育者にピアノスキルが不足しているという事情から、CDなどの録音音源をカラオケのように使用してこどもたちに歌わせることも少なくない。しかし現場で、保育者自

身がいわば「生演奏」を行うことは、幼児の音楽表現を引き出す上できわめて重要であると考えられる。たとえどんなに簡略化された伴奏であったとしても、生演奏であればこどもの反応に即座に対応することができる。録音ではそのようなことは難しい。その他にも、身近な先生が目の前でピアノを弾いてみせることによって、そのスキル自体がこどもを惹きつけ魅了することができる点、その心地よい伴奏に乗って自分も音楽的に歌おうとすることが期待でき、また電子音ではない手作りの音を聴くことのできる、今日にあっては貴重な機会である点など、弾き歌いのスキルは幼児の音楽表現を引き出す上でほとんど必須の条件であると考えられる。

次にアンサンブルについて、一人でもままたぬ初心者レベルの学生に合奏（アンサンブル）をさせるのはなぜか。保育の現場において、保育者が自分の演奏のみに集中することはまず不可能であろう。保育者はピアノを弾きながら歌も歌い、さらにその間、視線は常にこどもたちに注がれていなければならない。また皆が歌っているか、こちらに関心に向けているか、よそ見をしてはいないかなど、周りの状況に常に注意を向けなければならないため、楽譜や鍵盤を凝視しての演奏は不可能である。アンサンブルの体験はそのまま、相手の音を聴き、判断しながら自分のパートを弾いていくことであり、客観的・第三者的な耳を保ちながら演奏する訓練になると考える。

### 三、考案した指導法とその実践

#### (一) 指導対象について

本学における当該授業（音楽Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ）の位置付けは、卒業必修であり、幼稚園教諭・保育士免許取得必修であるため、資格取得希望の学生全員が受講する。学科内の男女比は男子が六割〜一七%で、大幅に女子学生の比率が高く、対象となる学生の全般的な傾向を分析すると、美術系の教育機関であるため、どちらかといえば適性も意識上も美術系のスキルに長じており、音楽に対する苦手意識が高い傾向にある。

総合的な音楽歴としては、新入学生のうち、毎年ほぼ半数以上がピアノを習ったことのない初心者であり、高等学校における芸術の授業で「音楽」を選択受講していない者が多くを占めている。ピアノに触れたこともなく、楽譜を読むことさえ中学校の音楽の授業以来という学生がいる反面、音楽系のクラブ活

動経験者としては、吹奏楽・軽音楽部の出身者が毎年5名前後の一定数おり、他の音楽歴としては、エレキトーン、ギター、ミュージカル経験者等が散見される。

音楽への意識やモチベーションについては、上記のようにかなりばらつきのある状態である。当面は、二年次秋の最初の幼稚園教育実習においてピアノスキルが一定のレベルに達していることが求められるという事情もあり、二年間という限られた期間で、全くのピアノ未経験者も必要相当レベルに到達できるように指導が必要となる。

次に、学生のピアノ練習時間の現状について表1に示す。欠席者および休退学者がいるため、アンケート回答学生数が前期よりも後期は減少している。数字上は顕著に表れているようには見えないが、実際には後期最終日の演奏発表に向けて練習する学生が増えている実感がある。

その他に受講学生に見られる傾向としては、中学校・高等学校の部活で吹奏楽などを経験していた学生は常に楽器を演奏し、音楽に馴染んでいるので、ピアノについては全くの未経験であっても意欲があり、習得が早い傾向にある。また、他府県出身者で下宿生活を送る学生のうち、毎年一定数の学生が下宿に電子ピアノあるいはキーボードを置いて練習できる環境を整えており、ピアノスキル習得への意欲と姿勢が感じられる。

表1：学生のピアノ練習時間の現状

練習時間	週4時間以上	週3～2時間	週1～2時間	週1時間以内	週0時間	無回答
A年度前期 25名中	3名	8名	9名	3名	2名	0名
A年度後期 22名中	2名	7名	9名	3名	1名	0名
B年度前期 21名中	3名	6名	7名	3名	1名	1名
B年度後期 18名中	5名	6名	3名	4名	0名	0名

## (二) 指導の実践

### ① 基礎的なピアノスキル育成

ここでは本稿において最も重要な基礎的なピアノスキル育成について具体的に述べる。筆者が幼稚園教諭・保育士養成機関等において長年に亘って指導をしてきた経験の中で、試行錯誤しながら確立に努めてきたピアノスキル習得のための実践法である。

目標にかなうピアノスキルの習得のためには最初の導入が最も大切である。指導教官はこの最初の段階を丁寧な受講生に伝え、理解させる必要がある。初心者はもちろん、既学習者にも言えることは、まずは最初の姿勢が肝心であるということである。正しい姿勢でピアノに向かうことが力みのない自然な奏法を生み出すからである。まずはしっかりと「座る」ということに意識を持たせる。腰骨を立て、身体の重心を感じながら背筋、上腕筋、前腕筋、と支えになる大きな筋力に意識を持たせ、そして最後に五本指ポジションに導くようにする。この時に手首には決して力みを加えず、あくまでも腕と指先だけでバランスを取り、指は鍵盤の上に留まるのみにする(鍵盤の下まで押さえない状態)。指先と腕の関係、腕を支える背筋への意識、この意識こそがピアノを弾ける姿勢と指のフォームを形成する。美しい、弾ける指のフォームは、身体全体への意識があつてこそなのである。指のフォームばかりにとらわれていては、いくら正しいフォームを目指そうにも、かえって力みからくるフォームの変形(関節が凹むなど)が直らないものである。そもそも身体の発育過程を考慮しなければならぬ子どもと違って、受講生は骨組みと筋力ができ上がっている状態にある。身動きままならぬ満員電車内で片足立ち、つり革を握って十五分耐えられるだけの体力、腕力があればピアノの鍵盤を弾くには十分の筋力を有していると言える。読譜と指の動きが繋がらないだけで、楽譜を離れて指を動かすのみであれば初心者でも十分にピアノを弾くことができる。実際のところ、ピアノ指導教員が短いメロディーなどを弾くと、たいがいの受講生が聴き覚えて模倣して弾くことができるものである。

ここで大事なことは、楽譜を読み取ると同時に指先に伝達する回路を訓練することである。パソコンでのキーボード入力におけるブラインドタッチ同様、目は楽譜上に置き、音符を読みながらいちいち鍵盤を見ないことを原則とする。本物の目には威力があるので、指を見ながらしか弾けない習慣をつけてしま

と、指先の目が育たないのである。指先の目を育てること、すなわち読譜と指の回路がスムーズに繋がることを常に心がけることが肝要で、このことが後の上達を左右する大きなポイントとなる。

次に、生きた音楽には息と拍があること、身体の自然に即していることを伝える。呼吸すなわち息をすること、心臓が打つ拍、脈すなわち拍子を感じることである。これらの導入がしっかりとできてからいよいよ指の訓練に入る。ここでは、アルフレッド・コルトーやアンナ・ヒルツェルランゲンハーンによるピアノの指の訓練のためのメソッドにおける、それぞれの導入部を取り入れる。二つのメソッドに共通する初歩段階における五本指の基本練習は、五本指の均一、独立および機敏性<sup>(6)</sup>(コルトー)を得るためにあり、指に対する意識、各指の独立強化、柔軟性、音をつなげて弾く、手全体の強化、一本一本の指に意識を与えらるなど、体理的経過が意識して感じられるように学ぶ<sup>(7)</sup>(ランゲンハーン)ことを、受講生に分かりやすく実践させ、実感を伴った理解をさせる。あくまでも導入なので、指先の感覚がそれとなく実感できる範囲で十分である。

また、これらの基礎的な指の訓練や楽譜から離れて自由にピアノの音を出してみることも「表現」に踏み込んだピアノスキル育成のためには重要となる。身体を緊張と力みから解き放ち、弾かねばならない、楽譜を読まねばならないところから離れて、自由に鍵盤を触って音を出すところから始める。束縛から離れると、大きい音や小さい音、高い音と低い音、優しい、厳しい、怖い、悲しい、嬉しい音などの表現が自在になる。これこそが音楽表現の基本となる、音楽的な音色を出す第一歩である。

### ② 既存のメソッドの活用

ピアノスキル習得のための基礎教材として、初心者にはバイエル教本を活用している。バイエル終了後はブルクミュラー二五の練習曲、ブルクミュラー終了後はソナチネアルバム、ソナタアルバムへと進める。これらの教本は大多数の保育者養成機関において使用され、幼稚園や保育園などの現場の教諭のほとんどが周知のテキストであることから、誰からもピアノスキルの習得度・習熟過程が理解されやすく目安にされやすいため、当該授業においても使用している。さらに幼稚園教諭・保育士になるためには、従来バイエル教本の終了が最低条件とされているので、初心者の受講生はバイエル教本を一年次での終了目標

としている。もしこれに達しなかった場合でも二年次六月初めには終了義務として、受講学生全員がピアノの初歩段階をクリアし、九月の幼稚園実習に臨めるよう授業スケジュールを組んでいる。

また、読譜などの基礎を学ぶ楽典のためには、バスティンメソッドのセオリーレッスン一、二巻(ピアノライブラリーシリーズ)を活用している。バスティンメソッドとはアメリカのジェーン&ジェームズ・バスティン夫妻により創立されたピアノ教育体系メソッドである。ピアノ演奏技術のみならず音楽のあらゆる分野を幅広くバランス良く習得できるのが特徴で、セオリーレッスンは、音楽理論の分野のテキストおよびワークブックにあたる。ライブラリーシリーズは学齢期(六才以上)適用であり、大学生にはかなり平易ではあるが、初歩の読譜の基礎がわかりやすく学べ、こどもの歌の弾き歌いで必修の伴奏型である主要三和音、調性の理解に大変適している。各テキストはそれぞれ半期で終了し、受講学生にはワークブックの全ページに解答を書き込み、提出することを義務付けてしている。

### ③こどもの歌の弾き歌い

こどもの歌の弾き歌いは、幼稚園教諭・保育士にとって最も必要とされるスキルのひとつであるため、ピアノ初心者であっても最初から取り組むことが必須である。まずは、自在に確実に弾けるピアノスキル、良い発声でのびやかに歌える歌唱のスキルそれぞれが必要であるが、これを同時に行う弾き歌いは誰にとっても思いの外に難しいものである。歌うだけであれば、歌詞も音程も確実にしっかりと歌えるのだが、ピアノで伴奏を弾きながら歌ってみると、ピアノを弾くことに集中するあまり、身体も力んでしまうので満足に歌えなくなってしまうものである。歌うと手が止まり、弾くと声が出ない。特に初心者は、まだ弾くことに不自由で力みから解放されておらず、目線も声も鍵盤に向かっていないため、満足に声が出せず、周囲の者に歌声が聴き取れないことが多い。ピアノは力まず、全神経の七分目以下で弾けるようにすることが必須である。ピアノに合わせて歌うのではなく、歌にピアノが入っていく感覚で弾き歌いをするのが基本となる。こどもの歌のピアノ伴奏は初心者にとってはかなり難しいものが多く、後々にはこれを弾けるスキル習得が必要だが、弾き歌いそのものができることが必須なので、簡易で容易な伴奏型を習得することが必要で

表2: 初めての弾き歌いテキストの内容 調性はハ長調(Cメジャー)のみ

	メロディー(右手)	伴奏和音(左手)	うた
グレード1	◎5指ポジション	I、V	ぶんぶんぶん、かっこう、メリーさんのひつじ、ちょうちょう
	◎5指ポジションのまま若干の移動		かえるのうた、10人のインディアン、ロンドン橋
グレード2	◎5指ポジションのまま若干の移動	I、IV、V、V7	むすんでひらいて、チューリップ、手をたたきましょう
	◎5指ポジションより広がる		きらきらぼし
グレード3	◎5指ポジションより移動・親指越えと親指くぐり	I、IV、V、V7	あくしゅでこんにちは、おおきなくりの木の下で、ひげじいさん、うんどうかい、こぎつね
	◎日本のわらべうた	G音(ソ)とA音(ラ)の2音のみ	かごめ、げんこつ山のためきさん、なべなべそこぬけ
グレード4	◎メロディーが付点リズム、シンコペーション	I、IV、V、V7	おかえりのうた、おべんとうのうた、かたつむり、こぶたぬきつねこ、どんぐりころころ
		借用和音	アイアイ



図1 メリーさんのひつじ ベース奏



図2 メリーさんのひつじ 和音奏

ある。簡易な伴奏としては、ベース奏と和音（ハーモニー）奏があるが、ここで重要なのがハーモニー、すなわち和音である。あらゆる曲に対応できる主要三和音を理解し、習得することが弾き歌いへの早道となる。（図1、2参照）

当該授業では、主要三和音のみの伴奏型によるこどもの歌を集めた「初めての弾き歌いテキスト」を作成し、実践している。右手メロディーの五指ポジション、主要三和音の種類によってグレード分けをし、順序立ててバージョンアップを図れるように工夫されている。既存の優れたテキストが多く存在するが、極初歩からわかりやすく和音を耳と指で理解できるように、主要三和音（I・IV・V・V7）を徹底的に手に入れる訓練ができるよう、オリジナル版を作成し使用している。これを表2に示す。

訓練のポイントは、次の通りである。

- ▽ 手を見ずにどの和音にもスムーズに移行できるようにする。
- ▽ 歌のメロディーにふさわしい和音を即座に選んで弾けるようにする。
- ▽ 和音（コード）は、ブロックで弾くのみならず、ブロックコードなど何種類もの伴奏型にアレンジして弾けるようにする。
- ▽ Cメジャー（ハ長調）から始め、Fメジャー（ヘ長調）、Gメジャー（ト長調）、Dメジャー（ニ長調）までを必修とする。

表3: 2016年度のピアノ・うた発表プログラムにおける連弾曲目

ジブリ系	アシタカせつ記、さんば、テルーの唄
ディズニー系	美女と野獣
ミュージカル、映画系	私のお気に入り
ジャズ、ポップ系	ウキ・ウキ・ブギ・ウギ、 シーサイド・フリーウェイ、 テイクファイブ、 おおシャンゼリゼ
クラシック系	春のバイエル、 よるこびの歌（ベートーヴェン作曲「交響曲第9番」より）、 ファランドール（ビゼー作曲「アルルの女」より）
ぐるぐるピアノ*	土曜日の木星（ホルスト作曲「木星」のアレンジ版）、 チョップスティックス・バイエル、 鐘（ビゼー作曲「アルルの女」より）

\* ぐるぐるピアノは作曲家・伊藤康英氏発案のリレー式ピアノアンサンブル形態。シリーズとして複数冊の楽譜が出版されている。

④連弾（ピアノアンサンブル）

当該授業では連弾などのピアノアンサンブルを重視しており、年度最終授業日に実施する演奏発表の際には、受講学生全員が二人四手あるいは三人六手による連弾、四名以上によるリレー式演奏を行なっている。なお、この演奏発表ではピアノ独奏（二、三名）、歌アンサンブル（二名による二重唱）、全員による合唱、複数の楽器を使った合奏、合唱付合奏も行なっている。各曲のピアノ伴奏は、よほど難易度が高い場合を除いて基本的には学生が演奏する。

以下、二〇一六年度の最終授業日に実施した演奏発表（ピアノ・うた発表）のプログラムにおける連弾曲目を表3に、演奏後に実施したアンケートに書かれた学生の感想を表4に示す。

表4: 演奏発表で連弾を演奏した後の学生の感想から

- ・本番できれいに合わせることができたことが本当に本当に嬉しかった。
- ・苦手と思っていた箇所をしっかりと本番で間違えてしまうところが悔しかった。
- ・練習できていたところが本番でできないことが悔しい。けれど練習がとても楽しかった。
- ・リハーサルの方が上手く弾けてたのが悔しい。
- ・少し緊張したけれど楽しく弾けて良い経験になった。パートナーに「ありがとう!」
- ・がんばった!最後はちゃんと弾けた!
- ・先生ありがとう!
- ・自分が失敗してしまったところが残念だった。本番のむずかしさを知った。
- ・今までで一番良い演奏をすることはできなかったけれど、連弾の楽しさを知った。

⑤ リトミック

当該授業においては、二年次の幼稚園教育実習前にリトミック体験授業を実施している。リトミックとは音楽を身体全体で感じ、リズムを身体で理解することによって、より豊かな音楽表現力を身につけることを目的とする音楽教育の手法である。そもそもリズムとは頭の中だけで拍数を数えるものではなく、身をもって感じ、実際の身体の動きで理解するものである。

こどもは身体表現で「大きいと小さい」「速いと遅い」といった逆の動作をすることが大好きである。実例をあげると、「大きいたいこ、どーんどーん、小さいたいこ、とんとんとん」「ぞうさんのあくび、ありさんのあくび」などの歌が、こういう動作を伴うものである。

表5: リトミック体験授業(約40分)

導入(ソルフェージュ)	動きやすい服装で、靴を脱いでの実技レッスン。 4分音符のビートを刻んだままリズムを入れていく。(4分音符、8分音符、16分音符など) 拍子: 2拍子、3拍子、4拍子(2人ペアで手を打ち合う)リズム遊び
即時反応	・まねっこゲーム(模唱、輪唱など) 先生の歌うフレーズをまねて歌う。 1フレーズをグループごとに時間差をつけて歌っていく。 ・ピアノの音に合わせて部屋の中を散歩する、あるいは走る。 Go & Stop! ゆっくり & はやく! ・指示された色のものを探してタッチする(ピンクと指示されたらピンク色のスカートにタッチする、など)
手あそびうた	おべんとうばこのうた など
即時反応	絵本と一緒に進める
模唱	「だるまさんが」「くまの木をさがして」
即興唱	話の内容に沿って、指導者がことばにメロディーをつけて歌い、それを生徒が真似して歌う。即興で絵本の中の一節を歌にしてみる。
ボディパーカッション	身体が楽器(「手」「ひざ」などを叩いて音を出す)

初歩のリトミック授業で実践する例としては、高い音と低い音の判別(高い音が弾かれた時には空に向かって両手を上げる、低い音が弾かれたら地面に向かってしゃがむ、など)、速い曲と遅い曲の判別(それぞれの曲の速さに合わせて走ったり歩いたりする)、長調と短調の判別(長調の曲が弾かれたらスキップ、短調の曲が弾かれたら立ち止まって胸に手をあてる、など)がある。

リトミック授業におけるこれら全てのこと、指導者がピアノを弾くことによって実践できる。幼稚園、保育園などで指導者(保育者)がこれを行うには、ピアノで遊ぶ感覚、いろいろなシチュエーションにふさわしい即興演奏ができるピアノスキルを持ち合わせていることが必要である。

表5に、当該授業におけるリトミック体験授業について示す。

⑥受講学生に対する評価指標  
 当該授業における受講学生に対する評価指標としては、四項目については、四項目について表6のように定めている。コンセプトに沿って「表現」を重視した評価基準であると考えられる。

表6: 受講学生に対する評価指標

発想・構想力	《基準》曲に対して抱いたイメージを具現(演奏)できる。 評価該当項目→ピアノ演奏発表
表現力	《基準》演奏によってさまざまな感情や情景を表現できる。 評価該当項目→弾き歌い
行動力	《基準》積極的に声を出すことができる。 評価該当項目→歌発表
継続力	《基準》恒常的に継続して課題曲の練習、学習ができる。 評価該当項目→出欠、平常のレッスンでの取り組み姿勢

#### 四、実践結果と考察

三章で述べた指導を本学における授業(音楽Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ)で実践した結果、まず言えることは、休退学者などを除く受講学生のほぼ全員が、保育の現場で必要最低限のピアノスキルを習得できたという点である。

実際の習得の進捗を大まかに述べると、音楽Ⅰ修了試験(未経験者であればピアノ歴4ヶ月目にあたる時期に実施)において、初歩教本のバイエル66番(導入段階から本題に入った程度)以降の番号の曲、「メリーさんのひつじ」または「かっこう」の弾き歌いが試験曲として課され、基本的に全員が合格する。

音楽Ⅱ(ピアノ歴9ヶ月目)では、バイエル100番台(初歩段階修了程度)を全体の三分の二ほどの受講学生がクリアし、残りの三分の一ほどの学生も音楽Ⅲの中間

進捗チェック(ピアノ歴1年2ヶ月後)ではほぼクリアし、これをもって初歩段階修了の目安としている。また音楽Ⅲ修了試験では、こどもの歌5曲の弾き歌いを課題とし、音楽Ⅲ終了後、最初の教育実習として幼稚園実習(ピアノ歴1年6ヶ月目)が始まる時には、最低でも5曲のこどもの歌の弾き歌いができるようになるという。

受講学生による教育実習報告からいくつかの例を挙げると、「とんぼのめがね」をこども達と一緒に楽しく弾き歌いできたといった報告や、園児の全体集会で園歌伴奏を任されたが、自分のレベルよりも相当高い曲だったので猛練習して無事に弾き終えた、こども達は歌う意欲が十分であったのに自分がスムーズに伴奏をすることが出来ず、こどもたちがそれに合わせて歌い直したり、歌うタイミングを待つて合わせてくれたりしたことが申し訳ないと思ったり、猛練習をして次の機会にはスムーズに弾き歌いできた、などがある。また、実習園から課題として出されたこどもの歌の伴奏譜がむずかかったので、授業で習った主要三和音の伴奏をメロディーに当てはめてみたり、「初めての弾き歌いテキスト」を実際にそのまま使用したという報告が数件あった。いずれも大入学時にはピアノ未経験者だった学生によるものであるが、このことから三章③で述べた容易な伴奏型の習得が必須であることが明らかであると考えられる。

実習学生が幼児の音楽表現を引き出すことができたかどうかを筆者が実習先訪問時などに実際に見て確認することは叶わないことが多いが、実習報告の詳細な内容から、実習学生のピアノスキルが引き出したこども達の表現の様子をうかがい知ることができる。学生自身の音楽表現力については、平常授業時に十分に知ることができる。例えば、ひとつの楽曲をこども達の午睡の際に、これから眠りに入るための子守唄として弾く場合、そして午睡から覚めてこれから活動しようとする時に弾く場合、どう弾き分けて違いを出せるかを試してみるのである。これがある程度学習の進んだ学生に実践させてみると、午睡の前か後であるというほかには細かな指示もないのに、学生は音楽的に色調を違えて弾き分けることができた。同じ曲でも柔らかい音色でゆったり弾いてみるのと、早いテンポで明瞭な音色で弾くのでは全く曲の表情が異なるものであることを、学生に実際に弾かせてみたり、指導教員が模範的に弾いてみせたりすることで、ひとつの楽曲にも多様な表現があり得ることを実感させる。レベルを

問わず、ほとんどの学生がこの表現の違いを正しく理解し、弾き分けることができるので、これこそが保育の現場で必要なピアノスキルであることを学生にしっかりと認識させるのである。表現することに意義を見出した学生の演奏はそのままでも達の心に響き、なんらかの表現をこども達から引き出せるものであると考えられる。

また音楽Ⅱ、Ⅳの修了演奏発表において四手または六手連弾などのアンサンブル形態での演奏を課題とした結果、ほぼ全員の学生が互いに連帯責任を感じながら授業外での練習時間を積極的に確保するなど本気で取り組み、本番での演奏は平常の授業時のレベルよりも遥かに上回るものであった。自分一人では味わえない豊かなサウンドと表現が体験でき、演奏の充実感が得られること、そして何よりも演奏終了後の達成感、喜びも大きいことが「連弾」のメリットと言える。(表4参照)

全般的なことに目を向けると、幼稚園教諭・保育士養成機関のひとつである本学での授業における指導実践から得られた問題点は、総体的にひとりひとりの学生に対峙するレッスンの総時間数が不足していることである。特にピアノのレッスンはマンツーマンで行うべきものであり、筆者はこれを実践しているが、レッスンでの課題曲における演奏困難箇所や問題点等について学生と共に考え、反復練習を行う時間が充分に取れないのが実情である。これはほとんどの幼稚園教諭・保育士養成機関における共通の事情であると言える。学生が弾けない箇所が弾けるようになるまでの反復練習に指導教官が付き合える時間が確保できないということは、この訓練のほとんど全てを各学生の個人練習に委ねるしかなく、これによって弾けない箇所が弾けなまま放置され、学生のモチベーションや習得のペースが下がったりする懸念がある。限られた時間内で目標にかなうピアノスキルを育成するには、その必要性・重要性を学生にしっかりと伝えて理解を得ること、そのためには学生自身もできる限りの時間を割いて練習する必要がある、それを習慣づけること、すなわち学生自身が高いモチベーションを持つことである。指導教官は学生とできる限りコミュニケーションを取り、人としての信頼関係を築くことで学生をスキルアップの方向に導くように心がけなければならないと考える。

本学の授業概要は「保育の現場で必要とされる「弾く」と「歌う」を balan

スよく習得できるレッスンを行う。」ことである。三章二節で述べた指導実践によって、歌う、弾く、聴く、動く、などの音楽表現を学生が体験し、音楽そのものの楽しさ、奥の深さ、豊かさを知ることができれば大変な進歩である。

以下、表7に全授業終了後に実施したアンケートに書かれた学生の感想(抜粋)を示す。入学時にはピアノ初心者で不安を抱えていた学生が多かったが、全授業を終えた時には充実感と満足感を持ち、さらに継続していききたい意欲と意志を持つようになったことが分かる。学生自身が高いモチベーションを持つことが、音楽表現力の向上に繋がっており、ひいては目標にかなうピアノスキル習得へのステップアップになる。

## 五、おわりに

幼児の音楽表現力を引き出し育むためには、まず保育者自身が豊かな感性と表現力を持ち、質の高い音楽技能、ピアノスキルを有していなければならぬ。幼児が美しい音色と感じる第一歩が保育者の奏でるピアノの音色ということもあり得る。

しかし、学生たちと関わっての印象を述べると、美しい音を判別できる「良い耳」を育てるには、良い「音楽環境」を作る必要がある。テレビから聞こえてくるコマースシャルの音楽、アニメ音楽、スマートフォンや電気器具の音、アラーム音など、枚挙にいとまがないほど身の回りには電子音が溢れている。全てが悪いわけではないが、これらの人工的な音ではない、温もりを感じさせる手作りの音による音楽、すなわち楽器の演奏、それも生の演奏に触れる機会や環境を意図して作るよう、保護者および保育者などの周囲が十分に配慮することが必要である。幼少時の「音楽環境」が音感を育て、聴く耳を育てるからである。

保育者は単に、こどもの歌の伴奏譜を正確に弾けるピアノスキルだけではなく、幼児の音楽表現の第一歩となる美しい音に対する感動を引き出すピアノスキルを習得することが必要である。そのため、保育者養成機関においては、限られた時間の中でいかに効率良く、幼児の音楽表現を引き出すピアノスキルを習得させられるかが常の課題となる。保育者志望学生の意欲はもろろん、指導教官の資質、音楽能力の高さも求められる。



表7: 全授業終了後の学生の感想(抜粋)

- 大学生になってピアノを始めて1年が経ちます。この音楽の授業のおかげでたくさんの歌を歌い、たくさんピアノにふれることができました。自分が練習すれば上手になるし、やりがいもあり、発表は緊張するけれど、とても良い経験になりました。2年でもがんばります。(1年次生)
- 音楽の授業を受けて、歌もピアノも好きなので本当に楽しかったです。大学生になって一人暮らしになり、家にピアノがないので、毎日17:30までの限られた練習時間を大切に使いました。後期は遅刻が目立ってしまったので、時間を守れるようにしたいです。(1年次生)
- ピアノが以前よりすごく上達できたと思います。楽しい授業で本当に好きな時間でした。(1年次生)
- ピアノはやるだけ上手になるので、もっと練習しておかなければなあと思いましたが、昨年度よりはだいぶ弾けるようになったので良かったです。(2年次生)
- 歌唱指導の練習をすることで実習に向けてのピアノの自信ができました。(2年次生)
- ピアノ好きです。
- ピアノむずかしかったです。でも楽しかったです。
- 音楽はやっぱり楽しいし奥が深いと思うことができる時間でした。
- 音楽苦手だけどとっても楽しくできました。
- ピアノを継続的に取り組んでいきます。
- ピアノの練習や歌うことは継続したい。
- 来年もできるならやりたいです。3、4年でも音楽の授業があったらいいなあ。(以上、2年次生)

本稿では幼稚園教諭・保育士に必要な、幼児の音楽表現を引き出し育むピアノスキルについて、その育成と実践法について論じてきた。限られた授業時間で保育者志望の受講生に習得させなければならない幼稚園教諭・保育士養成機関において、いかにして最大限に成果を出せる指導ができるかについて、検討・考察を重ねてきた結果、三章二節で述べたような指導法を実践するに至った。特に三章二節①で述べた「ピアノを弾くこと」への導入は、幼児の音楽表現を引き出すピアノスキルを習得するための最重要な第一歩であると筆者は確信するところである。今後さらには、より良い育成法を見出せるよう、引き続き研究を重ねていきたい。

#### 引用文献

- (1) 厚生労働省 『保育所保育指針』(平成二十九年告示) 二二頁
- (2) 同右
- (3) 文部科学省 『幼稚園教育要領』(平成二十九年告示) 二二頁
- (4) 文部科学省 『幼稚園教育要領』(平成二十九年告示) 二〇頁
- (5) 文部科学省 『幼稚園教育要領』(平成二十九年告示) 二二頁
- (6) アルフレッド・コルトー著 八田惇 訳・校閲 『コルトーのピアノメソッド』(Edition Salabert/全音楽譜出版社、一九九四年) 四一八頁
- (7) アンナ・ヒルツェルランゲン著 原田吉雄 訳 『ピアノのための指の訓練』(Bärenreiter/全音楽譜出版社) 一一頁

#### 参考文献

- ジャンヌ・ブランカール著 永富和子 訳・註 『初心者のためのピアノ・テクニクの基本原理』(Edition Salabert/全音楽譜出版社、一九九四年) 八一―九頁
- 植田光子 編著 『手あそび百科』(ひかりのくに株式会社、二〇〇六年) 二一八―二二三頁
- 音楽教育研究協会 編集 『新編 幼児の音楽教育―音楽的表現の指導―』(音楽教育研究協会、二〇一一年) 一七―一九頁